服群臣之心。不能徒服之。必有足以服之者焉。失群臣之心。非徒失之。必有足以失之者焉。余讀史。每至壬申之亂。未嘗不容疑焉。夫大海人。雖叔分爲人臣。弘文雖姪名爲人君。以臣奪君。乃天下之大變也。而人臣之向背頓異者何也。弘文果有足失群臣之心者歟。吾未見之。適觀其器局英發。有人君之度。不愧爲天智之嗣爾。而及大海人一舉兵于吉野。群臣之中。向彼而背此者。沛然有不可遏之勢矣。是吾之所以不能不容疑焉。上下反覆。潛慮沈思。而後始知出於天智之處置失宜。而不足深怪也。天智之四年。使弘文爲太政大臣。是天智之失策也。夫太政大臣。雖尊爲人臣之位。雖重爲人臣之職。使他日嗣大位之皇子。居人臣之位。司人臣之職。以示中外。中外或謂。他日傳大位不在皇子。而在皇弟。故豫置皇子於人臣之地。而爲之極也。蓋皇極以后嗣舒明。孝德以弟嗣皇極。齊明以姊嗣孝德。由是觀之。不必傳位於子者。舒明以來如爲例者。故中外之設心。亦未足怪也。是以天智晏駕。陵土未乾。輒尋干戈。豈可不惜哉。嚮使帝夙立弘文爲皇太子。以繫中外之望。以帝之德。加以太子之賢。中外豈肯不往此。而往彼。不謳歌此。而謳歌彼乎。故曰。壬申之亂。出於天智之處置失宜。而不足深怪也。

明治二十六年の秋に熊本なる第五高等中學校數百の人々と軍裝して大分縣なるとへまからんとするをりあらかじめ作れる道ゆき

園哲雄

一段

物のあはれは秋のみぞ。多うるとおり風うよぎ。野もせに咲ける八千艸の。いづれ劣らぬ花すゝき。ほに出て人を招くをり。文机にのこ寇りかゝり。いかでか居らむかゝる世も。もし濤騒ぎ塵たゝば。千里の駒に鞍れきて。目にもの見せん軍だち。馴らさゞらめやうちなびく。黒髪村に白妙の。雲に聳ゆるうつばりの。まなびの窓のろの中に。集ふ百千のますら男が。謀り合せてろらぞふ。大分さきてうち向ふ。」

二段

進みたつ田の山里を。東へ行けばさゝ波の。大津に出でゝ瀬田の橋。ゆきかふ人よあふみ路や。うねの野ならぬ立野より。仰げば高し赤膚の。山の畑は夕立の。雲かとこえて雷の。鳴りはたゝきて一時に。あまた落ちくる聲するは。すがるの瀧のうちたぎり。岩に碎けて眞白なる。霰は横に迸り。あわてふためく青淵は。千尋の底の沸き騰り。立つ水烟捲きかへり。すはや龍とろ目の前に。飛び躍りなんばかりなり。」

三段

見れどもあかず又みまゝど。あか瀬の橋をうち渡り。阿蘇の宮路に詣つれば。たもふも遠き神八井の。ことの御末久しくも。つゞきゝませる惟孝の。君が家門たからかに。寶くささくなる中の。輝きわたる螢丸。ある代の亂ありし時。惟直の君佩き給ひ。菊池の君と諸共に。たゝらの濱に戰ひて。醜草あまた斬り拂ひ。及は鋸なせる夜に。あやしき光飛ひきつゝ。もとの刀となれるより。この名負ひぬることゝかや。遠く隔たる九重の。みかどの

御爲つくされし。　ろの眞心のしのばれて。　げに奇靈なるこの光。　かくるゝ世ころもゐるらめ」

四　段

からのやまとの文の名を。　高本大人は常磐なる。　萬つの松の廬のあと。　ゆかしく見えつ鹿漬川。　もみぢやいかに小嵐の。　山の夕映みわたせば。　杉のむら立つ手野の宮。　ほど近くあり猫岳は。　さもむくつけし猫またの。　怒れる牙かとぐ爪か。　もがくが如き勢は。　噛み攫みるん風情あり。　こは高峰のいくつにも。　碎けくてありければ。　峰くだけてふ詞をば。　誰がねこだけと訛りけん。」

五　段

介烏の湖あせはてゝ。　舟にも乘らぬ波野原。　過ぐれば豐の後。　直入禰疑野の土蜘蛛の。打猨八田と國摩侶と。　日代の宮の天皇の。　大御軍に射向ひて。　滅びし跡の塚ぞある。　北は大船　九重山。　南は祖母が嶽あれば。　やをら菅生をみかへりつ。」

六　段

吉田稻葉の川をもて。　南と北の湟とをし。　山もて四方を圍めれば。　蓮の根をせる穴道を。入れば竹田の岡の城。　跡もをつかし中川の。　君の御祖は和田伊賀を。　うちて勇壯なる名をしられ。　今久知の君はしも。　學のみちのはかせにて。　多のをしへ子睦び合ひ。　仰きかしつくところあり。　武かる事と文の事。　車の兩輪のごとしとは。　うべもいひけり柏峽の。　大野はふるき天皇の。　やをりたまひし名殘とよ。」

七　段

小春の空のうらゝと。　温見をすぎて荒木谷。　あら珍しき山川の。　清かる中を往く人の。
ゑがゝまはしくれもはえて。　いつしか立てるれのが身も。　から繪とありて風流士が。　吟行ひ
出つる野津原の。　ろの原つゞき大分は。　地大に廣くして。　又さらゝしかりければ。　碩田
ところ稱へゑか。」

八　段

國府は府内と改めて。　大友氏や大給氏。　世々襲がれたる城のあと。　今は縣の廳あり。　奈良
の御代にぞ世をすてし。　こゝろ金剛法戒寺。　上野の岡にはのみゆる。　蓬萊山には千年ふる。
松に春日の社あり。　あはれ鶴見の山鶴の。　思ふどちとや見るならむ。　鶴崎佐賀の關までも。
ふりさけ見れば茥落の。　港に遠くふきくるは。　伊豫の二名の風ならむ。」

九　段

名だゝる山の高崎は。　いと峻しかり風流人の。　詞やさしく「しはつ山。　あらの若葉にろざゝれ
て。　ねらふさつ男のたゆみなの。　よや」と歌ひしこともあり。　眞玉拾はん濱脇を。　あさりて
わたるあさみ川。　眺望宜かる觀海寺。　龜井は萬つ代祝ふめり。　湯桶固ろる鐵輪も。　いづれ
の山の硫黄の。　燒ける別府の楠の湯か。　旅に勞く人々の。　浴みて奇しき藥とぞ。」

十　段

出つる野口は山の裾。　石垣原の雨夜には。　矢叫の聲きこゆめり。　こは大友の吉弘が。　黒田
の君に破られて。　恨を呑みて死にしかば。　靈のしわざによるとゝや。　速見に住みし速津媛。
帝を迎へ奉り。　賊のふるまひ告げしかば。　來田見の宮に留りて。　大に議りたまひきと。」

十一段

日出は帆足の大人により。いとじかる名を世にしられ。日田の詩日出の文。あらべたゝへてありきとや。許多學びし人の中。賀來のはかせの君はもと。こゝよりはやく身を立てゝ。よろづの人の仰ぐあり。よに珍しき鳳凰の。尾を並べるか大空に。翔らむばかりある蘇鐵。松屋でらに聳えたり。妙國寺へぞ歸らむと。又歸らむと眞夜中に。呻りしよりも大あり。海の中なる眞清水の。湧ける處に群れ集ふ。城下鰈はこの國の。おゝなき饗應ものといふ。」

十二段

雲の冠いたゞきて。夏も氷れる白雪の。絶えざる峰のだち分れ。二つとなれる由布の岳。これぞあだ名の豐後富士。見ながら越ゆるかな越は。金山ありしろのあとの。立石にころ出つるなれ。過くれば豐の前。宇佐は畝火の白檮原の。宮のミかゞのいろ兄ある。五瀨のみあとゝ高千穗に。はかりたまひて東の。方にころいでまさめとて。こゝに來ませるろの時に。宇沙都比古らは足一つ。騰の宮を作りてぞ。大御饗献りしと。」

十三段

石もてかける猫橋に。武き名を得し君が舟。繫きしあとの塚ありと。穢麿とは誣ふとても。大内山に立ち蔽ふ。忌々しき弓削の黑雲を。わけの清麿君はもと。あおきなき世を宇佐の宮。神に誓ひてうち日さす。都へ上り頑狂。天にも登る勢を。たゞ一言よとわりて。氣疎き膽を寒さしめ。天つ日嗣の動きなき。御代とおしにし功は。山をも拔かむ力にも。はた世を蓋ふ氣も。くらぶべきかは上にして。天つ御祖のことのり。得報いまつり下にして。

今しもかくはほきらかに。 治まる御代に生れあひ。 あやにかしこき現つ神。 わが大君に正しくも。 仕へまつるは猶これの。 賜物なるぞ各自。 かゝる宮居に詣てゝは。 いかにあわれぞまさつらむ。」

十四段

ほはれし增さば今の世は。 勉め學びて日の本の。 光を四方の國々に。 輝かしつゝこの神の。 服順はざりし外國を。 向言ましゝろのゝこの。 わざをな絶ちそあの人の。 名にお劣りこの人は。 護王神といつられて。 行末遠くれはすべし。 死ぬとも生ける如しとは。 このおとぞかゝ羨し。 筋をぬがれて大隅へ。 流され道に殺さむと。 たばかりつれど電光。 鳴る神のこかこの神の。 守りたまひゝ幸もあり。 御許の山の阪路に。 たが馳せぬらん馬の蹄(石名)。 たがすり書さし硯石。 水の奇しく妙なるは。 燧の灘の潮水の。 滿干によりて滿干すと。」

十五段

驛貫川をうち渡り。 柳が浦の捨小舟。 ひく人もなく見えぬるは。 昔平の公達の。 笛をえならず吹きすさび。 こゝも都の月なれと。 屋嶋の浦に嘯きて。 浦又浦と傳ひつゝ。 流離來にし涙をば。 乘せし名殘よあらざるゝ。 艶にやさしき都なる。 花を戀ふとも武き道。 もゝ怠らば又ゝゝる。 零落ともなることほらむ。 銃とり直せ殿原よ。 心もわざも勵まずば。 世界に立つ術はあらざるぞ。 和泉の宮はふるき代に。 うま酒湧きて後は酢に。 湧き變りしが今は又。 渭水わきけりさらでだに。 わたる旅人袖ひぢて。 結ばまほしく見ゆるなり。」

十六段

伊勢にはあらぬ四日市。　犬丸川や錆矢堂。　ろら醒くふく風は。　鬼の怨める聲すらむ。　うらさびしくも過きゆけば。　出つる中津の中々に。　奥ぞゆかしき奥平。　君ころこゝに居たまひし。　跡著くあれその昔。　わが細川の君もまた。　こゝに居たまひ賤だまき。　數あらねども臣らが。　祖らもこゝに朝なゝ。　仕へまつりしことあれば。　斧に摧けし松のあと。　田に鋤かんずる古墳も。　ろこはかとなく吊ひて。　袖のしぐれにぬるゝかな。」

十七段

山國川の又の名は。　高瀬の川の又々の。　名は世に甚く廣瀬川。　川溯り菅の根の。　長くも道はありとても。　類あらぢのもみぢ葉も。　削るに似たる巖をも。　賞づる心し耶馬の溪。　山のけしきのめでたさに。　耶馬の溪とや名つけゝん。　ろぎたつ岩の聳木の村。　徘徊りて思ふには。　安藝あたりなる某の。　大人の妙なる漢文に。　よりて辛くも音くは。　しられ初めしがろの昔。　久ぢき世々に埋れて。　可惜秘めたる樋田の村。」

十八段

やがて跡田や羅漢でら。　こはろのもとを尋ぬれば。　わけて怪しき巖ある。　古羅漢より諸の。　佛は何を慣りて。　一夜の中にこゝにしも。　うつろひ來けん不審しな。　こゝにはうるさき地獄あり。　又極樂も搆へあり。　恐しや又たのもしや。　われころ誠實に拜まなめ。　助けたまへや南無阿彌陀。」

十九段

水を湛める千々の峰。　筍のごとつき出でゝ。　麓は暗き穴もあり。　木々は危く横に生ひ。　倒

にも生ひて上にさゝ。石と所を爭へる。壁なす岩のいや高く。落ちくる瀧の白玉は。柿坂むらにちりしけり。はむとも盡きじろの狀は。いふともはてじ繪にかゝば。金岡もがな歌ひおば。人丸もがなわくらばに。ゝくひ見けん人なくば。まだしも永く屈智林。くちはてあまし覺束なし。」

二十段

ろもくかゝるけゝきあり。世にしれざりし昔をば。何と歎かん又何と。憾みかこたんはかなくも。のさましかりき唐土の。孔子の才すら世に逢はず。宇土の牧なる池月は。宇治の荒瀨の逆捲くに。敵は矢ぶすまつくるとも。さもあらばあれ何のその。岩をも徹す梓弓。引きてかへらぬ景季を。颯と躍り超え魁の。又魁となりつるも。さて眞つ先のさゝ木ぬし。世に二つなく高綱の。たかきその名を揚げてころ。宇土より出てしかひもあれ。嗚呼美しのつくしなる。清き山河ある中に。住みて學べるうちに猶。髣髴たるものありと知れ。希有の高綱安藝のその。大人ころいかに稀ならし。」

題藤公在朝鮮望富嶽　隈本繁吉

突破鷄林八道衝。神州威武將軍鍾。戰餘無或懷鄉國。立馬汀沙望富峰。

牧谷橋上　仝

關山流水自仙寰。秋色却疑春色還。誰識匆々餘恨去。繽紛紅葉撲吾顏。

牧谷　水月哲英